

国際シンポジウム一

《講演録》 文体と速度と精神

池澤 夏樹

文体と速度と精神

ご紹介をいただきました池澤でございます。もっぱら今回は翻訳とは何かということについて、その具体的な例として自分が『古事記』に取り組むことになったことから、お話をしようかと思っております。

世の中には、原典原理主義みたいな文学の見方があります。つまり、シェイクスピアは英語で読まなきゃ分からない。詩というのは、本来、翻訳は不可能だよ。そういう考え方も、しばしば耳にします。例えば、三島由紀夫は日本の古典を現代語に訳すなんて、それは冒涇だよということを確認どこかで言っていたと思います。

五年以上前ですけども、僕が一人で日本文学全集を編むという無謀なことを始めたときに、古典をどうしようか。つまり、これは古文じゃなくて文学なんだから、お勉強じゃなくて楽しいものだから、やっぱり現代語にしよう、と基本方針を決めました。この全集は、『古事記』から現在活躍している作家まで、日本文学史全部をたどるという方針で、三十巻のうち十巻ほどが古典語の訳になります。

『源氏物語』そのものは普通は読めないです。一生懸命、それをお勉強して読むのもいいんですけども、そうすると、どうしても速度が落ちる。小説として楽しむには、せめてひと晩に一帖ぐらいのスピードが欲しい。すると普通の人には現代語で読むしかない。ともかく間口を広げて、日本の文学がどれほど面白いものであるか啓蒙的に知らしめたい

というので、全部、現代語に訳すことにしました。

三島由紀夫は、日本の古典を女神様のように思っ、あがめていたんでしよう。だから、冒瀆だなんていうことを言う。僕は、三島さんと違って大体が俗な人間ですから、女神様は拜むんではなくて、女神様の手を引いてきて一緒に暮らしたいんですよ。そうすると、あのひらひらしたお洋服では何かと不便であるから、すみませんけど、セーターとジーンズに着替えていただけませんかというのが、いわば現代語訳ということの意味であります。

これを誰がやるか。正確を期するとすれば、学者の方たちがいいんでしようけれども、しかし、あくまでも最後に欲しいのは文学なんです。ということ、文学者に頼もうということになりました。今、バリバリやっている作家、詩人、こういう方たちにお願しようと思っ、どの作品を入れるかをまず決め、それを誰に頼むか。欲しいのは文体なんです。誰の文体であれば、この作品にふさわしいかというのを、マッチングさせていきました。つまりマッチメーカー、英語でいうと仲人ですね。その作業をやっ、この作品に彼、あるいは彼女というふうに大体、決めて、それからご本人にお願いに行くというふうにして決めていきました。非常に幸いなことに、皆さん、ほとんどの方が快く引き受けてくださった。今の時代、日本の作家たち、詩人たちが、古典になんか興味があるだろうか、そんなことをやっている暇はないよと言われたら、それつきりだと思ったんですが、意外や意外、そのところは大変うまくいきました。

この文体を選ぶというのも、例えば『平家物語』のような長い、しかし雄弁な作品に対して、これは古川日出男で決まりだとか、そんなふうにして決めていくんですね。『枕草子』だったら、酒井順子さんという方が昔から、あれが好きだ好きだと大声で言っていましたから、当然お願いする。そんなふうにして決めて、そしたら「池澤さんは何をするんですか」って編集部が言うんですよ。「僕は総指揮者だから、監督するだけ」と、「そうはいきません」。

「将軍が前線に立って戦わないと兵隊はついてきません」「そういうものか」というので考えて、なるべく簡単な方がいいなと思って、それが『古事記』だったんです。といいますのは『古事記』は確かに一応、日本最古の文字化された文学作品、七二二年ですね。ですから古いので訳は難しいだろうと皆さんは考えられるんだけど、『古事記』の文体というのは易しいんですよ。まず、構文が単純です。それから、人々の振る舞いが非常に速くて、はっきりしていて、ためらいがない。あるいは微妙な心の変化などはない。『源氏物語』と比べれば分かりますと思いますが、源氏は非常に凝った文体で、心理の綾を書いていく。その裏にもさまざまな模様がある。あんなものは僕にはとても手が出せないと思って。『古事記』であれば、構文が単純で、心の動きが単純で、それから語彙の数も多くない。知らない言葉は多々ありますけれども、それは調べれば済むことです。実際には、本居宣長の『古事記伝』を下敷きにした西郷信綱先生の注釈本を横に置いて始めました。

始めてみて、何がもつとも翻訳で難しいかというところ、まずはどういう文体にするかですね。誰もが、こここのところ考える。文体が決まれば、あとは労働です。ひたすら量を重ね、積み上げていく。しかし、最初は実際の話、『古事記』にふさわしい文体は、現代語でどういうものか、ずいぶん考えました。読んでいくと分かるんですが、『古事記』の文体は非常に速いんです。サクサクと進む。人々の心のためらいがないと同じように、文章も、さつき構文は簡単だと言いましたけれども、簡単に、次々と畳み掛けるように重なるように迫ってくる。この速度感が残らなければ、翻訳として駄目なんじゃないか。古代人の物の考え方、振る舞い、そのためののなさを伝えるには、どうしても現代でも速い文体が要るところが、調べることもたくさん出てくるんですよ。そのままでは分からない。この説明をどうするか。普通であれば、それを本文に織り込むんです、さりげなく。ちよつとやってみたんですけど、そうすると途端に速度が落ちる。

最初は、『古事記』だったら僕の父親もやっていたな。あれでも横目で見ながら、ちゃっっちゃつとやればいいやと思っただんですけれども。ちなみに、福永武彦の子ども向けの『古事記物語』なんかは全部の翻訳でやっております。それを見たんですが、彼はいちいち説明を織り込んでいます。遅い、とろい、これは駄目だというので、もう一つ考えて説明すべきことは脚注にしましょう。そんなことはどうでもいいから話の先が知りたいという方は、脚注なんか無視してどんどん先へ行けばいい。気になったときに目を下に下ろすと、ページの下のほうに説明が付いている。なるほどと思つて、また次へ進むと。あるいは、全部読み終わってから、脚注だけ拾つて読むという方もいらっしゃいました。

いかに翻訳でも、普通の文学の本で脚注はつけません。これは、『古事記』だからこそ許される特別なことだと、自分では思いながらやりました。ですから、他の翻訳者の方に別にくわしくしてくれとは言っていない。これは対象となる作品の性格で、どうしてもこういうことになったんであつて、皆さんがこうやるということじゃないです。むしろ、良い子の皆さんは、真似してはいけません、というつもりでやりました。

実際に手にとつていただければわかりますが、本文のほうは、なるべく余計な荷物は持たせないようにして。注はそれだけでも読めるようにしています。そうしますと、少し長い説明でもいくらかでも入れることができます。例えば伊耶那岐と伊耶那美という、国生みをした最初の神々。この名前の由来ですね。これは、お互いをセックスへいざなうという意味です。これが含められているということを注に書いていく。文体そのものはなるべく今風に、崩し過ぎないところで今風にして、全く普通の、今の文章として読めるように心掛けました。あえてもつたいぶつて荘重にはしなかった。

『古事記』が一見分かりにくい理由の一つは、三つの全く異なる種類の文章がモザイクになっていることなんです。一つはここに見るような神話、あるいは物語、伝説の普通の文章。普通は皆さん、ここを『古事記』だと思つて読まれる。

とりわけ、上つ巻の神話めいた部分が、むしろ『古事記』の本当の部分だと思っ
ている方が多い。ところが、『古事記』には、あと二つ違う種類の文章がある
んです。その一つ目は、神々ないし天皇、豪族の名前の羅列、つまり系図
です。これはたくさんあって、しかも名前は大変に長い。それにまたいろいろ
意味があるんだけれども、そのまま書いたのでは読めないぐらい、ずらつと
名前が出てくるだけだから、いいやここはとって、これまでの現代語訳では
大体、すっ飛ばしてもいいような扱いでした。しかし太安万侶にすれば、ここは
何か意味があって、あえてここまで詳しく系図を書き記したわけです。その理由
というのは非常に政治的なもので、『古事記』全体は天皇家の権威づけとい
う目的を持っていました。天皇一族と、さる豪族の間の関係、この姻戚関係
から始まるわけですね。それが分かるように書いていく。早い段階で天皇家
とつながったものは優れた力がある豪族であるから、そういう扱いにして、
下の方の中は、もっとずっと下のほうでつながっているようにする。その辺り
を意図的に、非常に計算して彼はやったと思います。

まず、普通にダットと書いてしまうと何が何だか分からなくなるから、
一人ずつで改行する。改行したところで、世代を一つ下るごとに一字下げ
をする。だから、誰その子の子の子になると一段ずつ下がっていく。そう
いうふうにして、それから、あとは名前そのものも、普通は片仮名にしちやう
んですけれども、まず漢字、その下に初出は丸かっここで読みをいれます。
二回目以降は漢字に振り仮名です。重要な人物は何度も出てきますから、
三回目ぐらいになると一部分だけ抜き出す。建速須佐之男タケハヤスササノヲなら須佐之男
だけでいい。少しでも読みやすいようにと考えました。パソコンがあっ
たからできたのであって、手書きの原稿用紙でこれをやっていたら、頭が
おかしくなると思います。大変便利な時代になりました。

もう一つは歌です。翻訳していると、やっぱり声が聞こえてくるんですね。文字になっているけれども、しかしまだ声の響きがどこからも、どこでも鳴っている。特に歌のところは、それがはつきりと聞こえる。つまり詩ですから、これは訳してしまってもいいかどうか。響きが残るように原文をそのまま書いて、その後一段下げをして翻訳を載せると。響きが分かれば、意味も取れるというふうにしてみました。『古事記』の中の歌というのは、ある場面で、誰それがこう歌ったというふうに書かれています。実際には、既に世の中に広まっていた民謡だと思います。それを適当なところにはめ込む、そういう方法によって歌謡の魅力も盛り込む。この辺りは、太安万侶の非常に優れた判断だったと思います。そういうふうにして、基本方針をつくってどんどん進めていきました。

内容はどうか。つまり、文体の次に速度の問題、それも解決した。じゃあ、『古事記』というのはどういう話か。僕らの中に偏見がありました。僕が『古事記』を訳すと言ったら、ちょっと年上の方たちが、「池澤さん、あれ天皇制賛美の本でしょう。そんなものやっていいんですか」と。旧左翼のかたがたです。読んでいないんですよ。読んでみたら、天皇家のために書かれたということではあっても、天皇たちの賛美の面が非常に少ない。ほとんどゴシップ集ですね。特に大事なのは、忘れてならないのは、武勲を誇るものはほとんどないです。神武天皇は確かに次々と歯向かう者どもを退治して、東へ進んで王権を建てた。しかし、そこは抽象的であって、一つ一つの戦いによって、どれほどの功があったかということはほとんど書いていない。

これは多分、日本という国はなかったけれども、この島々に暮らした人々がほぼ同じ言葉を使って、同じような文化を持って生きていた。そういう時代になってから『古事記』は書かれた。統一が終わってしまって、王権が確立してからつくられた。そして、ここは島国ですから、そうなる外來の勢力はまず入ってこない。つまり、異民族同士

の戦いがないんですよ。したがって、異民族相手の戦いにおいて勝利を収めたことを誇るといふ姿勢も非常に薄い。国を造ったということが大事なんだと。その点、他の国の初期の文学は武勲詩が多いんですね。フランスでいえばローマに行ったとか。つまり、功を立てたことを褒めて歌うというものが多くいんだけど、『旧約聖書』だったらジェリコの戦いみたいな。勝った負けたはさまざまありますが、戦いの話が多い。しかし『古事記』にはそれが大変に少ない。誰それは立派な天皇であつたという記述はありますが、そう書いた先ですぐにゴシップになる。

仁徳天皇は、立派な天皇の典型のように伝えられています。仁義の「仁」と「徳」ですよ。こういう、儒教的な価値観そのものを体現した名前がつけられる。よく知られているのは、高い所に立って里を見ていたら、人々の家から煙が立っていない。煮炊きをして食べるほどの経済的余裕がないんだということに気がついて、しばらくの間、税を取らないことにして、みんなが豊かになったところで、煙が上がっているのを確認してから、また税を復帰したと。いかにも「仁」という字にふさわしい性格のように思われるんですが、彼の天皇としての所業についてはそこまで、その後はずっと女性に関するゴシップです。

奥さんが大変な焼きもち焼きでして、他の女性を近づけさせない。天皇というのは存続しなければいけない。そのためには子孫を確保しなければいけない。子どもが生まれなければ、大変困ったことになる。従って、一人の妻では不安であるから妻を増やす。この時代はまだ呪術的な考えがとても強かったです。地方豪族の娘を呼び寄せて妻にして、その地方の呪術的なパワーを持ってきてもらう。半分おまじないで国を運営しているようなものですから。卑弥呼の場合は一番、有名ですけども。だから、各地の美女を呼び寄せて一緒に暮らすというのは、むしろ天皇の権利である以上に義務だったんですね。ところが、この奥さんがそれを邪魔する。地団太踏んで悔しがって、ギャーギャー

叫ぶぐらいの焼きもち焼き。他の来た人たちがみんな嫌になつて帰つちゃうんですよ。吉備の国から黒比売という美女を連れてきたんだけれども、結局、奥さんがいじめて追い出してしまふ。そうやって、いかに女性問題に苦勞したかという話が延々と続きます。

その例として、女鳥メドリという女性の場合が面白い。そういう美女がいると聞いたので、仁徳天皇は弟を派遣して彼女を連れてこようとする。速総別ハヤフサワケという人物ですけれども。速総別は女鳥の所まで行って、天皇さまがこう言っているから来てください、と言つたのを彼女は断るんです。奥さんの焼きもちを知っていたから。私は天皇の妻になりたくない。むしろ私はあなたの妻になりたいと、メッセンジャーである、使者である速総別にです。二人は一緒になつてしまふ。それを知つた天皇は、軍を差し向けて二人を捕まえようとする。そこそこで、二人は逃げながら、歌をいくつかお互いに詠む、歌の交換があるんですけど。単純に、そこからさらに先に逃げて、宇陀の蘇邇まで行つたとき、追討の兵が追い迫つて二人を殺した。あっさり、それで終わつてしまふんです。

全体に文体が速いと申しましたけど、こういうことなんです。ともかく、彼らは出会つて好きになれば、欲しかったらすぐに奪う。邪魔だったら殺す。明快ですよ。そういう心の動きの時代だったのか、あるいはその後、例えば『源氏物語』で完成したような凝つた文体をまだ持つていなかった。心の動きはいろいろあつただろうけど、それを表現するだけの語彙や言い回しがなかっただけかもしれない。言ってみれば、欲望がはっきりした人たちでした。時代とともに人の心がどこまで変わるかって、これは難しい問題ですけど、しかし明らかにこの時代は、そういう直情径行のためらいのない、欲望を前に押し出していく人々だったと言えると思います。それが、今はなくなつてしまつたのか。

実は、この『古事記』を全集の第一回配本として出した次の巻、この全集の二巻目を僕が中上健次という作家に当てました。中上の作品の中から何を選ぶか、一冊に入れるのにいろいろ考えて、配列を決めて。それから中上について解説を書きながら、はっと気が付きました。彼の書く世界は『古事記』と同じなんですよ。大変にはつきりしている人々、振る舞い。だから、愛と憎しみの両方がとても強い。これは、彼が新宮の出身で新宮を舞台にした三部作、四部作があるんですけど、この人々が、時代にすれば二十世紀前半から六十年代ぐらいかな、振る舞いが『古事記』の中の神々や、豪族や天皇たちによく似ている。だから、今われわれが、いかにも穏やかな貧血気味の生き方をしているとしても、それはわれわれの面の一部であって、強い強引な生き方をする人々がこの国にいないわけではない。そういう意味では、『古事記』は今につながっていると思います。

『古事記』を訳していて何が分かったか。話を元に戻しますと、なぜ僕が個人編集の日本文学全集を作るうなどと無謀なことを考えたかといいますと、東日本大震災なんです。あれで、僕は身内は亡くしませんでしたけど、仙台に年を取ったおばがいるんで、その身を案じて、それから実際に現地に、最初は新聞社に言われて行ったんですが、行き始めてずいぶん通いました。

真っ平らになってしまった例えば仙台市の荒浜地区辺りで、なんかあまりに情けない。形に出せない、つらい。みんながそういう思いだったんですけど、あのとときは。その中で、なんで、こんなに災害の多い国で暮らしてきたんだろうということを考えて、地震があって、津波があって、火山が噴火して、台風も来る。他の国を考えてみたら、これほど自然災害の多い国は珍しいです。でも、ここがわれわれの国土であり、そしてあらためて思えば、島国であるから生きづらいところもあるけれども、しかし島国であるから、いいこともいろいろあった。つまり、外国の軍勢が

来るとはほとんどなかった。でも、海の幅があれぐらいで済んでいるから、隣の中国という非常に大きな立派な文明に学ぶこともできた。人も渡ってくるし、文物も来る。それを参照しながら、自分たちなりの国造りができた。この海は船を渡すことはできるけど、大きな文物を一気に渡そうとすると相当大変です。地面がつながっていて、だからと走ってくれば済むというのは全然違う。そのおかげか、おおよその日本人は、一九四五年まで異民族支配は知らないできました。世界史を見渡しても、こんな国は本当にまれです。

国というのは、地面に書かれた国境線で囲われているのであって、それは簡単に力があれば踏み込むことができる。そうやってさまざまな民族が出たり入ったりして、何とかつくられるのが国であって、中国でさえ、あの王朝は何度も替わっていますね。日本の場合は、それさえなかった。そういうことを含めて、この災害の多い、しかし島国ということで守られた国に生きてきたわれわれは、一体どういう種類の人間であるか。どういう精神を持っているか。何が特徴なのか。そういうことが知りたいと思うようになりました。僕は、実は日本の古典についてなど本当に無知蒙昧であったんですけど。そうだ、文学全集をつくれれば、きっと必死で勉強するだけろうし、そしたらなんか分かるだろう、と。無責任な話なんですけど、そんなきっかけで始めまして、『古事記』の翻訳をしただけでも、ずいぶんいろいろなことが分かったと思っています。

先ほど、天皇の武勲の話が少なくてゴシップが多いと。争いがあるのは、いつも皇位継承するときですね。そこでは殺し合いがしばしばあります。誰が次の天皇になるか決めるために、競争相手がいなければいいわけだから、殺してしまうということは何度もありました。しかし、これは言ってみれば家庭内の殺し合いで、それが何万人も殺すことにはつながらない。大体、これもおいおい分かったことですから、皆殺しをあまりしませんね、日本は。主立っ

たものを退治してしまえば、あとは、そのものを横取りする。これも、また同じ言語を使って、ほぼ同じ文化の中で暮らしているから、他者に対する排除の意識といえますか、憎しみがあれば、これは人間的なんですけど。そうじゃなくて、消してしまうというふうな考え方になかなかならない。日本史でほぼ唯一、女子供も含めて三万人全員を殺したのは島原の乱ですね。多分、あの場合はクリスチャン、キリシタンという人々が異民族に見えたんだらうと思うんです。幕府の側には、異民族に対する一種の恐怖感があつて、恐怖からああいふ行為に走る。あるいは、キリシタンの後ろに海外の勢力がいるのではないかと考えて。あそこまでやったのは珍しい例です。

それから話を元に戻すと、日本人というのはどういう人たちであるか。『古事記』から明らかなのは、まずセックスが好きである。恋愛が好きである。恋愛はもちろん、そのままプラトニックということはあり得ないわけで、セックスにつながる。何といつても話の始まりが、お手元に配ったような伊耶那岐と伊耶那美の交わりからですから、最初からそれ。したがって、恋愛が大変好きであつて、それが実をいいますと、『古事記』からずっと日本文学の大きな軸になっている。それにしたがって、女性の地位を高めていく。女性たちが男性たちと同じように登場し、活躍し、喜び、悲しみ、死んでいく。これは、実をいうとなかなか珍しいことです。人間と恋愛の話が中心になる。例えば、中国文学を考えてみますと、あの国には、基本的には恋愛詩がありません。李白も杜甫も、恋愛の詩は書いていない。儒教の下では、結婚というのは親が決めてするものであつて、勝手にくつついちゃいけないんです。ましてや、そういう感情を詩で歌うなんて、してはいけない。だから、表に出てこないんですね、恋愛感情って。紅楼夢のようにずっと後になってからはありますけれども、古代中国文学で恋愛というテーマはまずありません。

それに比べると日本場合は、『古事記』から始まって、『万葉集』では相聞という部立てがある。その後、恋がある。

延々と恋の歌がつけられ、恋の話が書かれた。天皇が万世一系といいますが、実際はともかく、それが建前として今までつながった理由の一つは、彼らは古代のある時期以降、摂関政治が始まってからは政治にタッチしなくなったかからです。天皇の仕事というのは、まずお祈りをして国の平和を保つこと。それから、文化の継承に力を注ぐこと。今でいえば歌会始に至るまで、宮中ではずっと歌をつくって広めてきました。ここで、明治になってから一つ変わったことがあります。天皇が恋の歌を詠まなくなったんです。歌会始に「恋」というテーマが出ることはありません。それは、つまり明治大帝はなんとって武張った姿勢を示さなきゃいけないから、軟弱な恋の歌など詠まないほうがいいということになったらしい。

この方は大変たくさんの歌を詠んでいます。あるいは、あるのかもしれないけど表に出てきません。大正天皇も詠んでいなし、昭和になると今度は実際にも西洋式の一夫一婦制です。いったん結婚してしまったら、恋の歌を詠むわけにいかない。まずいんですよ。そういう訳で、ある時期から表へ出なくなりました。しかし、恋愛というのは日本人の精神にとって一大関心事でありまして、だから、あの時代に『源氏物語』のような、ほとんど恋愛だけをテーマにした長大で立派な小説が書かれたわけですね。

それから、『古事記』を読んでいて思うのは弱者への関心が非常に強い。弱い側、負けた側、悲しんでいる側に目が行く。これも珍しいことだと思えます。さっきの武勲の詩がないことと重なるんです。強い者が強いと褒めたたえるのではなく、それはさっさと済ませてしまっ、負けたほうに同意をする。消えていく姿を慈しむ。『古事記』の中で一番詳しく事跡が書かれた、誕生から死までを丁寧に記されたのは倭建ヤマトタケルです。彼は言ってみれば、最初は粗暴な美少年でした。それから、父に言われてあちこちを転戦しながら敵を退治して、その途中、いろんな女性たちと

交渉を持っている。最後に故郷へ帰りたいたい、大和へ帰りたいたいと嘆きながら、それがかなわぬまま旅先で死にます。その、故郷へ帰りたいたいのに帰れない。父親が多分、彼を遠ざけたんだろうと思います。その嘆きが余韻として、彼の死につきまといっている。亡くなった彼の魂は、白い鳥になって飛んでいったと。それを女たちは必死になって追い掛けた。石や岩で足を血だらけにしながら追い掛けたけれども、結局、彼は消えてしまったと。そういう、勝った強い姿じゃなくて、病に倒れて死んだ姿のほうが後に残るような人物になっている。その頃にも、いつでも負けたほうに目が行くんですね。

もう一つ例を挙げれば、目弱^{マヨワ}という少年がいました。彼の父は殺されたんです。殺した相手が彼の母を自分の妻にして、天皇となった。目弱はそれを知らない。ところが、あるとき縁の下で遊んでいた。非常に床の高い建物だったらしく、その遊んでいた縁の下の上で、自分の父だと思っていた人と母とが一緒に寝ていた。事が終わった後、父が一つ心配なことがあるんだがと。あいつが大人になったときに、自分の本当の父を殺したのは私だと知って復讐しないだろうかということ、妻に向かって言う。それを目弱は聞いてしまう。そして、二人が寝入ったところに行つて刀を抜いて、その偽の父を殺す。つまり、実の父の敵を取ったわけですよ。これは一つ裏があつて、親たち二人がセックスをした場所は神床というんですけれども、本来ならば天皇が一人で寝て夢を見て、夢の中に神のお告げを聞き取る神聖な場所なんです。そういう所を別の目的に使ったから、神が怒ったんだという解釈もできる。いずれにしても、目弱は父を殺した。

そうすると、その一族の復讐が怖い。実際には、後に雄略天皇という、乱暴で有名な人物ですけど。慌てて目弱は都夫良意美^{ツブラオミ}という、家来に当たる人物の家に逃げ込む。でも、軍が来て周りを包囲し、都夫良意美に、目弱を差し

出せと言う。しかし、断るんですよ。それは仁義にもとると。いったん助けにくれと来て、かくまっているのを出すことはできない。しかし、多勢に無勢、かなうはずがない。中に入った目弱に、「こういうことになりました。とても勝ち目がない。どうしましょう」、「私を殺してくれ」と言うので都夫良意美は目弱を殺して、自分も自殺する。やっぱり、ここでも強いほうではなく、弱いほうに目が行く。一事が万事そうです。

女性の活躍も、登場が多くてさまざまに書かれるということを申しましたが、これも、実は珍しいかもしれない。例えばギリシャの『イーリアス』、トロイ戦争の話です。あの中に、女性はほとんど出てきません。出てきたとしても、戦利品です。勝ったら、きれいな女をおまえにやるぞと。それが、内輪げんかの種になったりして。それは仕方がない話。仕方がないから、ずっと後になってエウリピデスは『トロイアの女たち』という悲劇を書いて、彼女らの嘆きを伝えようとした。この女性たちが登場する、あるいは後の世になると文学に携わるようになる。日本では『万葉集』の初めから、女性の歌人がずらっと出てきますね。この傾向が大体、平安朝の終わりまで続いて、その後でだんだんになくなって、日本史の表に女性が出てこなくなる。応仁の乱から後は、本当にいなくなったといえます。まるで違う国になってしまった。だから、紫式部その他女性の作家たち、それから歌人たちの名前があって、それがあるところで途絶える。その次に女性の文学者として登場するのは、実は樋口一葉なんです。その間、ほとんどいない。江戸時代、俳人として、俳句の人としてちょっと名の知られた加賀千代女のような人はわずかにいましたけれども、全体としては男天下になってしまった。だから、日本という国の日本人の性格ということについても、やっぱり変わっている。明治維新から後は、また大きく変わりましたね。昔は戦の勝ち負けに際して、相手を大量に殺すということはしなかったんだけど、日露戦争から後はお互いにすさまじい殺し合いをするようになって、その例は枚挙にいとまが

ない。変わるものです。もちろん周りとの関係において変わったと言えるんですけども、やっぱり変わった。

翻訳に話を戻すと、古典の作品を楽しむためには、翻訳はどうしても必要であると考えて、今回はそうしました。しかし、訳さないもの、今もそのまま元のテキストが使われている例もあります。一番分かりやすいのは舞台の世界ですね。お能、狂言、歌舞伎、文楽、こういうものは元のテキストのままです。それを楽しむのに少しお勉強する。お能は難しいですね。あれは古典というか、故事来歴を踏まえていますから、それを知らないとは分からない。つまり、小野小町が誰かを知らない、卒都婆小町も草子洗小町も分からない。お能を楽しんだのはみんな武士ですから、彼らは教養があったから。一応、事前にちょっとお勉強をした上で行って楽しむ。だから、文体も非常に凝った詩的な文章ですし、それを楽しむことができた。それに対して、狂言は庶民のもので。ですから、時代は現代であるし、幽霊も出てこない。言葉は室町時代辺りから後の日常語です。これはそんなに難しくありません。言い回しをいくつか覚えれば、大体、楽しめます。それから、お能と違って展開が速い。展開がおかしい。やりとりが目の前で見える。だから、狂言はずっと楽に楽しめます。歌舞伎や文楽になれば、これは江戸時代の後半の文体ですから、聞いていてまず分かる。

去年辺りですか、僕は狂言の新作を書きました。年末、十二月に千駄ヶ谷の国立能楽堂で四回の公演をしたんですけど、狂言の新作というのは難しくありません。形が決まっていますし、言い回しも大体、決まっています。それに沿って、それらしいセリフを書いて話をつくっていきましょう。まず、橋掛かりから出てきた人物が、「この辺りに隠れもなき大名でござる」と名乗る。まず名乗りをする。これは、芝居にとっては珍しい形ですね。きょうはお日柄も良くて、どこそこについて何々をしようと存ずる。まずはそろりそろりと参ろう、と道行きというか歩きながら、誠に、という

言葉から始まって、情景描写を述べる。そこに太郎冠者が出てきて、あるいは山伏が出てきて、時には猿が出てきていろいろあって、最終的には、普通は誰かが大失敗をして、相手に追い掛けられながら逃げて行くのを「やるまいぞ、やるまいぞ」と追って行って終わる。このワンパターンを踏襲すれば、そうそう難しくもない。ちなみに僕に新作を頼んだのは野村萬斎さんで、言葉遣いがおかしいところは、彼が全部手を入れてくれる。そういうわけで、何とかうまくできました。だから、型にはまった室町ぐらいの文体なら、偽造するのはそう難しくない。先ほど申し上げた宮中歌会始、あれは比較的、古風な伝統で今も短歌で行うわけですから、あれも、ある意味では昔ながらのなぞりとしてつくられていると言うことができるかと思います。

芝居は、そのままがいい。英語のシェイクスピアは、まず原文のままです。あれを現代語訳にはしない。それも、この全集の中でやってみたんですけども、現代語にしてみましたものを狂言というのは、何となくいいのかなという気がするんですね。面白い試み、そこから新しい芝居が生まれてくる、それもそうなんですけど、しかしやはり元のものとは違うようである。

たしかに翻訳することによって失われるものもあります。音の響きは残らない。しかし、残るものもあるし、残ったものが翻訳された先の言語で別の展開をしていくことがある。翻訳がなかったら、それこそシェイクスピアは誰も分からない。トルストイも読めない。失われるものがあることを承知で、得られるもののほうを重視してつくっていく。これは非常に文学的な姿勢です。それは、つまり和歌の世界で本歌取りという方法があるのと同じように、原文があって、訳文があって、そこから広がる。それを信じなければ、翻訳はできません。

同じように、編集という仕事も非常に文学的な仕事です。編集というのは、雑誌や本をつくるのではなくて、素材

を並べておいて、それを取捨選択して、一定の基準の下に作品に仕立て上げる。早い話が、太安万侶がやったことです。あるいは『万葉集』の編者がやったことです。あの和歌のアンソロジーは、当時の編集の結果ですね。あるいは『今昔物語』のような短い話を集めた本、あの場合も素材を集めて一定の基準に従って並べていく。あれも文学にとっては大事なことです。今は個性が大事という。要するに作家一人一人の違いのほうを言い立て、創作の姿勢を重視しますけれども、それとは別に、翻訳も編集も、文学にとつては非常に大事な基本的な営みであると思います。

太安万侶は何がやりたかったか。彼は書いたんじゃないんですよ。彼の手元に素材が全部あったんです。各地の豪族から集めた、あるいは天皇家に伝わっていた、それを取捨選択して一定の意図の下に配分して、それから一番大事なのは文字遣いをつくったこと。基本的には一種の漢文ですね。しかし、そこに固有名詞などを伝えるために、漢字を音だけで扱ったところがある。これによって、日本語が漢字で表現できるようになった。これは後に発達して、いわゆる万葉仮名になりました。基本のところは、彼が用意したものです。実際の話をすると、彼一人じゃなかったと思います。官庁の中に、言ってみれば国史編纂所のように古事記編纂センターがあつて、何人かの知的な官僚たちがそこで働いていたんじゃないか。ほぼ同時期に『日本書紀』のほうもつくられていたわけですから、この二つは協力したのか対立したのか、面白いところですね。そういうふうにしてテキストが生まれ、さらに今になって訳され広がっていく。これは、小説一つを書くのと同じように大事な文学的な営みであると思います。

ありがとうございます。

*本講演録は、池澤夏樹先生のご講演をもとに古事記学センターが編集を行ったものです。